

2018年9月 航空宇宙カンパニー半田工場ご視察会 主な質疑応答(要旨)

2018年9月
株式会社SUBARU
総務部SR室

Q：生産ラインを止めないように、どのような工夫をしていますか？

A：材料の納期管理のほか、サプライヤーも含めた日程管理やサプライヤー間の輸送の最適化を行っています。これらの取り組みにより、東日本大震災の時にも納期遅延は起こしませんでした。このような実績もあり、2002年と2011年にはボーイング社からサプライヤー・オブ・ザ・イヤーを受賞しています。

Q：航空機では中央翼以外の部位は生産していないのですか？

A：SUBARUは、複合材製品の分野でアドバンテージを持っています。複合材を使用したボーイング767・777の主脚を格納するドア、ボーイング737の昇降舵（水平尾翼に付いている機首の上げ下げをコントロールする舵）、エアバスA380の垂直尾翼などはSUBARUが生産しています。

Q：航空宇宙カンパニーの今後の展望を教えてください。

A：2018年3月期の売上高は約1,400億円でした。これは7年ほど前に比べるとほぼ倍増しています。現在は新型機の投資回収の期間で若干厳しい状況ですが、投資回収の期間が終了すれば、再び成長していくと考えています。

Q：半田工場は沿岸部にありますが、地震や津波への対策はどのように行っていますか？

A：地震による倒壊を防ぐために、建屋はすべて耐震構造としています。半田工場に繋がる橋が崩落した際の避難ルートも設定し、人員の安全確保の仕組み作りも行っています。また、津波に対しては、ハザードマップが示す波の高さにさらにマージンを見て、生産設備の位置をかさ上げし、万が一想定以上の津波が来ても影響が出ないようにしています。

Q：航空宇宙カンパニーの営業利益率を教えてください。

A：2018年3月期の営業利益率は約8%です。航空機は1つの機体のライフサイクルが20～30年で、生産初期の製品は利益率がどうしても下がります。原価低減が進んだボーイング777は既にモデル末期のため生産機数も減少していますが、後継機の777Xが順調に機数を伸ばし原価低減が進むことと、ボーイング事業以外の拡大も見込まれることからカンパニーの営業利益率は10%程度に回復すると考えています。

Q：原価低減の活動はどのように行っていますか？

A：今後も長く使われる部品が、コスト高の設計になっている場合は、設計からやり直すこともあります。ただし、性能と安全は絶対に落とさないのが大前提です。

Q：航空宇宙事業としての設備投資の状況を教えてください。

A：ボーイング 777X の量産に関する設備投資は一通り完了していますが、増産に関する設備投資は今後必要です。また、防衛関係のヘリコプターの量産に関する設備投資は、今年いっぱいかかる見通しです。

Q：品質を保つための仕組みは、どのようになっていますか？

A：1つの工程ごとに検査を行っています。それぞれの工程は、誰がどの道具を使って行ったのかをすべて記録し、履歴が追えるようになっています。そのことにより、万が一何か瑕疵があった時、それが性能・機能に影響しないことを保証するシステムが、非常にしっかりしています。

Q：航空機はある一定時間飛行すると、検査や部品交換を行うと聞いていますが、中央翼の場合はどのようにしているのですか？

A：航空機の場合、定められた期間に対し最低2倍の安全率で設計しています。中央翼の場合は、1度主翼と結合した後は、その機体がリタイアするまで外しません。

Q：耐用年数を過ぎて廃棄になった航空機は、どのように再利用していますか？

A：SUBARUが完成機体として納めた航空機は、展示品などとして再利用します。またその際、内部の計器類などは部品取りを行い、外観も中身もほとんど再利用しています。

Q：中央翼の設計は、ボーイング社とSUBARUどちらが行っていますか？

A：ボーイング 777・787・777X は、国際共同開発で、さらに中央翼は様々なインテグレーション（各部位の結合）がありますので、SUBARUがボーイング社へ行って、一緒に設計・開発を行います。

Q：SUBARUが航空機事業を行っていることを知らない人が多いのではないですか？

A：2017年4月に社名を株式会社SUBARUに変更しましたが、これは、「航空機ブランドとしてのSUBARU」ということも含んでいます。今後も航空機とクルマ両方のSUBARUとして、お客様やステークホルダーの皆様をしっかり訴求できるように取り組んでまいります。

以上